## パリの合

五十年入学 稲 賀

壑

美

寮から三体にでかける気楽さが魅力だった。

に、 民名簿みたいなものが、 てみると、何のことはない、 というイタリア人ぽい名前のフランス国籍の女の子で、 九八二年一月初旬に、 aikido と書いているのが目に入った。 ようやく完成し、 18 同じ階のお向いさんで、栗毛を肩ま リの住家である大学都市 ながめて居たら Rita 部屋をたしかめ 日 趣味の欄 本館 の住

でたらした、何となくお高くとまっていそうでとっつきにくく、

に余る運動活動のうち、 講権を得るわけである。 りの武道場、 の打ちまちがえを捜してくれるフランス人を求めていた で、ここにはバ ことから再び開いたわけである。 あって、 敬遠していた女の子だった。ちょうど、でっち上げたタイプ原 約百フランの受講料プラス使用料で、 場は、 ずれにしろ、 足を洗った筈の合気道とのおつきあいの道が、ひょんな 酒を一杯ひっかけてから、意を決して戸をたたいた。 大学都市内の国際館という、中央の豪壮な建物の地 プールその他の設備が整っている。一年三学期に スケッ 住家から歩いて三分の距離であるから 1 他に学生や部外者も別箇料金で登録 いくつかの使用権と、 のコート、 壁うちのテニス、 大学都市の住民は、 選択した種目 五十畳 駒 + 0 ば 各 か

人物。 話してくれた。 1) 中先生御一行のユネスコの招きによる演武会のことは良く憶えて 素質のある人物で、 ろうが、居合を見、 ジアかどこか出身の色の黒いずんぐりした弁護士で、 をした経験はないそうだが、パリの本部系の道場で長らく学んだ て、とりわけ、 先生はジャン・ピェール・ラザフィ 少々型にとらわれているのは当地 田中先生の抜刀には多く学ぶところのあった旨 剣で相手をしてみると、たしかにすじの良 基礎は実にしっかりしている。 での Razafyという、チェニ 師 0 影響もあるの 数年前 日 本で稽古 かの、 田

外国 月の に二段 む。 集 の種だとはラザフィ氏の言うところだが、 と忙がしがるパリ人種のこととて、必ずしも一定しないのが 1) 連 を守るために持ち出した言い訳け、 5 感としてつかんでいる。 だろう。 中 と剣とを交えて二時半より五時まで。 人だからわかる、 玉 も当地の昇段 水まる。 一中に 三月だかに初段をとった学生が一人居るが、 7 しないではな の青空練成は無報酬であるから、 たるや、 人には 月年 他 人の体力と技術におそれ 0 を申 人 は また自分には の空手や柔 この 末に 空想もつ これに日 0 0 しょせ とても日 し渡して恥かしくない。 指導で、 は 否定 基準は、 は 熱意のお蔭で、 ん武道 なぞと、 できぬにせよ、 か ほ 道に比 曜の午前中も都合がつけば芝生の上で練成を積 ぬめも 事 心が ぼ 火・金と午后六時より八時まで。 本人ののんべ 全員、 実 日 武術 既に四年稽古を続けていると言う。どう のがある。 わ 本人のそれより厳しいようで、受験者た 頭から思い込んでいる我々の態度より 練習時間 当地で合気道に志ざすような若者の意 からない、 比較的初心者の多かった今年でも六 をなし の心はわ 様になる動作を身につけるに至った。 それも動機づけとしては、 んだらりと合気道をやっている ずいぶん破格な境遇と言える そこに 言い逃れではないかという気 剣の間合いなぞ、実によく実 た本家の方が、 は 参加は、 からぬといった言い草は、 と言うのだが、思うに、外 かなり多く、 それでも普通十人強は 一種の異国趣味が 彼など日本では優 個人主義者で何か 日 日曜や、 土曜 本人のお株 日 働ら 休暇 口は杖 日 頭 本 痛

> る。 劇的に出 0 は、 くものであることは、 もすれば実利や闘争心から発した入門も、 方が、 むしろ悟りきった顔をしている日本人よりも、 件の初段氏などもその一人で、 よほど健全か くわして、 何かの折りに突然啓示を受けて道が劈ける場面 つ謙虚 一緒に稽古していても、 当地においても何の変りもない であるし、 山口先生の当地でのスター さらに修業をすすめ おのづと昇華されてい は つとすることが 当地の 仲間 れば、 に たち 2 あ 種

(錬成会) 二日間の後に、

大変身をとげてしまった。

てい まり 山口 うというものだが、 ところまで時として補うほどで、 山 盛央氏が指導をされるとも伺ったのだが、 この種の錬成会は、 たティシィエ氏以下が 師一人が指導する。 先生の場合、ヴェルサイユに近い大会場に (半数以上有段者で白帯もかなりの経験者ばかり)、これ 4 かんせん、 欧州では比較的さかんで、 通訳は長期にわたって日本で指導を受け あたって、 この人数では 師弟間の交わりの深さもわ 山口先生本人の言い足りぬ 何 しろ受講者数が多い。 五 この秋にも植芝 はっきり言って 百 人ほどが かろ を

全く逆らわずして動きながら、 きが今までになく自由になりきっている。 んでしまった。 も決して悪くはなかった姿勢が目にみえて、 だが先述のデ 錬成の明後日、 ィディエ Didier 我 肝心なところにあやまたず、 々の稽古の時 君は、 組んでやってみると、 すっきりと伸び、 見事に勘どころを盗 に見ると、 今まで 何

大して効果が上がろうとは期待し得なかった。

どこかに殻を感じるわざとらしさが微塵も消えていた。遠慮も恣意もなく体を進める。今まで感じていた、上手なのだが

るも こと、 人いき Ш 0 正 直申す 残 稽 師 0 っていたことで 古 さらに、 で 0 れで小生も午後は 0 は 演 あとでそれ 武 な か をは 私 ににも 0 技 術では た たで二日間 ので (たし 山 を尋ねると、 ある。 先 な 頭 生 1) から かに暑い日で、 の意図は理屈ではわかったのだが、 痛くなっ 見 何かを学び得 てい ひとつには るだけでは た た おまけに 力が 例の と語ってくれ とても体得でき ふつ 錬 五百人 成会の 切れてい 八からの た。 疲 た れ

下でかくも深く学びうる若者も居る当地が、 れ 2 1) けて直 いうことを意味しておらず、 う に もあるまい。 待するところのい 2 のうえですら、 れとなくこの錬成の機会に渡されたように思えたからだ。 ひとたび日 0 は 0 一後の、 羨望 教えを をお 2 0 0 あ 逆に言えば、 変化 本 ぼ とつの熟した出合いの頃合いだったのだろう。 0 から師 7 える 悪条件 かばかりであるかは、 スプロ は 他 範が 决 の中で難なく吸収し、 な 的な盛況を呈し、 して彼の合気が 15 日 見えるとなると一日 むしろ彼の自ら解くべ が、 本から迎えられる指導者は、 彼 としても、 今さら 一山 日 しかもこの悪条件の 習得してしまった 本からの 口 説明を加えるま 流 今回は初段を受 五千円近い受講 く問 になったと 指導 題の とま この 陣 鍵 から 2 に

L

7

ゆかねば、

その責任を果せない。

事実迎える側の眼力と熱意

応えうるだけ

0

内実と、

語るべ

き

見

せるべ

きものとを具

精進 者は、 には そうした飽和 えて めの 求めるとともに、 出合いからこそ、 決して容易なものでは とができるのである。 を日 震動と核とを投げ入れるような効果を、 0 決してあなどり たしかに日 指導とあれば、 々傾けているのである。 状態の欲 逆に打てば響くが 本からの指導者の実地 大きな成果が生まれるの 得 求と技能と精神とに あるまい。 か 体調の維持は、 ものが あるのである。 しか 41 わば日 如く応じ得るだけ しなが 2 の特殊 稽古に、それだけの質を 本人指導者 であろうし それは 結 5 晶 な緊張感も伴 ただでも遠路 この張りつめ を析出 見事に果すこ の招 0 4 させるた 地 真 奏な の若 は

学 側に新 け入れる場合も増加しよう。その出合いを大切にしたいと思う。 ば幸いと念じたからである。 ある以上、これを好 させてい らラザフィ氏の受けを取っているクサヴ とは思ったもの に行くことになったと聞 15 的 的に述べ 0 こうした海外での合気道の盛行と深化は、 前 例が 体育指導員養成の私立大学の学生が今秋日本に たな対応 れば、 ただいた。 あ るが、 0 例 の可能性をひらくものと言 えば我々 庄 機に、 1) 後 ずれ当地で幹部となる可 司康生学兄と、 11 長期 剣 て、 の当地 既に我が の稽古でもつけ 小生 での稽 短 期 は を含 至誠館の若林先生とを紹 部 には 御 古 8 多忙 工 一仲間 わねばなるま 当 てもらえる折があ 了能性 日 然 W 0 本で留学生を受 rett 一人で、 中 我 のある学生 申 々日 「武者修業 さん もつば 訳 本 具体 0 君と な 人の

ある。 机上の るだけに、それに答えるのは 際ずいぶんと役に立ってくれた。 何やら、 会う人々には、 合気仲間 は決して誇張 知識でも初対面で場をもたせ、交友関係を広げるのに、 武術をたしなむ若者が実に多く、 彼らが日本にじかに触れたいという欲求を強く持ってい の女の子が 柔道、 工君 でも夢物語 新婚旅行で日本に行くとか、 大極拳、 の他にもパトリッシア Patricia という、 でもないのが、 我々の責務でもあるし、 空手、 滝沢先生の はては 当方のわずかな経験と 此地では如実に 『華道・茶道・ 「タイジュツ」やら さらにパリで出 喜びでも 実感 合気 実

導

れ

だと、 沫部員 思う。 ら盛り立て、実りあるものとするためのお手伝いともなれば幸と すますその機会を多くするであろう祝祭の場を、 な こうした具体的かつ日常的なおつきあいが、 我ながら妙な感心をしている次第である。 裏方の、 先生方の海外での演武 OBT 6 日 々のお膳立ての下地づくりは、 何とかその能力に応じた範囲 招聘· 講演といった、 例えば、 少しでも背後か 小生のような泡 では出来るもの これからま 海外遠征

という行為の方式や習慣のみならず、そもそも学習・習得とい 体験を得々として語ってみたのは、ひとつには、ものごとを習う し上げるのもおこがましいことだが、 しそれ以上の働きや体験をされている先輩も多くおられる中で、 既に海外遠征 出張 ・留学等の機会を通じて、小生と似た、 柄にもなく、 底辺」 0 な 0

か

か

この点は逆に「間」

というものの理解

0 を指導することが、 た概念それ自体からして異質であるに違いない社会に於いて、 機会となるのを痛感するからでもある。 何よりも自分自身にとって、 またとない学習

解されるかと思えば、 て当地の人々は時として欲求不満におちいる。 ない の場合ことさら意識されない差が当地では本質的区別とし 卑近なところから話を始めれば、 「何ものか」 0 日本では当然のこととしてあえて説明 存在には気付くものの、 いうまでもなく、 それがつ 日 かめなく 本 0 0 指

どうりには事が運ばず、 的 に は イミングによって表にも裏にもなり得るし、 なら「間」という概念は、 らにでも変化し得ることを教えることとなる。 そこで、 0 て区分される。 何 0 接触 か根 体の動きとして提示されるために、 銅 例 negatifというように訳す。 0 えば 価の表と裏といった相対的・ の前 わるわけであるが、 いかんとは全く無関係に適用される。 本的に二またに分かれた 表裏の区別が空間的な接触距離に相即 一教の表と裏というのを、 からその瞬間に至る両者の綜合的 さらにその区別があくまでも、 彼らは、一 時・空を包括する概念であるから、 ^ 相即的な動きが、 dichotomie 当地では 教は不合理だ、 間合い(空間的ないし時 日本語では、 そのいず 当然無 な場の占め方い この場合も、 取りの してはじめてどち positif この訳語では と判断する。 **処理がで** いわば 側 れとなるか の二種 動作とし 枚 間 類

思考風 は自明ではない。むろんこの体験は、個を前提として他を立てる 形 てもよかろう。 ということを了解させるがために、 になって存在する「場」の を前提にしなければ 態の 土と、 唯一のファクターとはならない。こうした空間は、 間柄を前提として状況判断の下に存在関係を規定す 算術的な速度 了解され得ない。 創造に自分たちが立ちあっているのだ (速さ+方向)が必ずしも場の占有 一教の稽古をしていると言っ むしろ、 時間と空間 がコミ 彼らに

る精神風

土の差と言えば説明はつく命題であろうけれど。

でたヒントが、それだけ効果的に示し得る、貴重な経験である。 といったヒントが、それだけ効果的に示し得る、貴重な経験である。 で食わされるようなかたちで解決を示唆される驚きであるし、また全くその存在すら見落としていた脇道に引き込まれて、「水平 に全くその存在すら見落としていた脇道に引き込まれて、「水平 でかにゴリ押してばかりいるからこそ、少しは引いてごらんとい でかい、こうした思考伝統ないしそれに影響し逆にそれから規定

かすことには東洋人よりはるかに活動的だが、ともすれば型にとかえって相手の芽をつんでしまうことにもなりかねない。体を動かえって相手の芽をつんでしまうことにもなりかねない。体を動かえって相手の芽をつんでしまうことにもなりかねない。体を動そのあたりの指導は、組んだ相手が何を求めどちらに進んでお

わずこちらの目を醒されるような事態にも直面する。

受とは異なった、 どういう態度=動作が合理的かを、 はする。 確立を目的とするひとつの参与形態として稽古をしたいという気 配慮もしょせん低空飛行でしかないが、ただ、 はや「同じ」ではなくなる。もとより小生のこととて、こうした でも相手次第で対応は全く異なってくる。むしろ技それ自体がも く示唆する、それが今の小生の行き方だが、こうなると、 らわれやすいこちらの人々と練習するにつけ、 たいようにやらせた上で、 一種の共同作業の場の創成としての学習過程の 彼らの求める結果を得るには原理 心の持ち様として、 一方的な技能の授 細部は任 それとな 世、 同じ技 的に

ずや、 見いだされるに違いないと思う。 から な小生は、まだこの特殊な環境のもつ利点を充分に活用できない 限りにおいて、 現実の表層を不断に更新する現象学的な営みとしての意味を持つ のが残念だが、 をすることは、 為を掘り起こして、その根拠を問い直し、 そもそも、 同じような体験をともにされんことを切望するわけである。 具体的な動作や技法のうちに、 稽古というものが、 さればこそ、 すぐれて刺戟的であると言わねばなるまい。 行動の無意識的前提を異にする人々とともに稽古 より才能もあり、 普段無意識の前 本質的な思索の勘どころを 意識に登せることで 感覚の鋭 提としている行 鈍感 必

\*

もっと軽妙な体験談にしようと思ったが、空論ばかりの色あ

の提出は極力廃して、奇想天外・抱腹絶倒・読ンデ為ニナル『赤 欲すら見えない日常性四畳半埋没、等々の批評を蒙りそうな原稿 勢の欠如。とっておきの話をとにかく短篇にしたてようという意 自分なりの小さな「発見」をいつくしみ、心をくだこうとする姿 または、内通者にしか意味のわからぬ説明不足のひとりよがり。 もわかる解説的・常套的文章にとどまって満足する「書きちらし」 を言わんとする努力の放棄ないし、その「何か」の欠如。 で翻訳可能な母国語を書くことまでは要求しないが、現役諸兄 ゆえに、 今の環境にあっては、この表現の不可能性をそれだけ痛く感じるが 0 存在それ自体に由来するずれに固執することにしか、だから自分 明ならざるを得ぬ記述結果が必然的に齎す障害。その本質的な それを語る言葉との懸隔のもどかしさ。記述不能の透明と、不透 せたお説教になってしまった。何かが見えたような気がして文に つづるも、出てきたものは既に死臭をただよわせている。始源と、 (女性は別)の文章が、時として甘く見えた。悪戦苦闘して何か 存在証明はない。 』をめざしたい。自戒をこめて。 かえって日本語に対する要求も肥大する。外国語に自分 母国語ならざる表現手段の常用を強いられる 一九八二年八月二十四日 誰にで